PROGRAMME
REPORT

China

文部科学省委託平成30年度初等中等教職員国際交流事業

中国政府日本教職員招へいプログラム実施報告書

2018
6.3-6.9

文部科学省委託 平成３０年度初等中等教職員国際交流事業

中国政府日本教職員招へいプログラム

実施報告書

北京市・甘粛省・上海市

2018 年 6 月 3 日(日) ― 6 月 9 日(土)

公益財団法人ユネスコ･アジア文化センター （ＡＣＣＵ）

はじめに

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU: Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO）は、ユネスコの基本理念に基づき、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現に資するため、アジア太平洋の人々と協働し、文化と教育の分野において地域協力・交流活動を推進しています。

ACCU は主にアジア太平洋地域の国々の相互理解と友好の促進を目的とし、日本政府および国際連合大学の協力のもと、2001 年より教職員の国際教育交流事業を開始しました。この国際教育交流事業は、日本と韓国、中国、タイおよびインドとの間で行われ、これまでに 4 千人近くの海外教職員を日本へ招へいし、また日本からは 1 千人近くの教職員を海外に派遣してきました。これにより、日韓・日中・日泰・日印間で、多くの教職員間交流および学校間交流が生まれ、これらの国々の相互理解と友好の増進に大きく貢献してまいりました。

日中間の国際交流事業としては、国際連合大学（UNU: United Nations University）の委託を受けて、文部科学省、中国教育部の協力のもとで国際教育交流事業「中国教職員招へいプログラム」が実施されました。2002 年から始まったプログラムを通して、これまでに延べ 1,657 名の中国教職員を日本に招へいしてきました。

翌 2003 年からは上記プログラムと対をなすものとして、毎年 10 名程度の日本教職員を中国へ派遣してきました。これらの交流事業の成果が中国政府に評価され、日中国交正常化 35 周年を記念する 2007 年からは中国の教育部による招へいプログラムとして、参加人数を倍増し、日中教職員相互交流のさらなる発展を目指して実施されるようになりました。

今年度は、文部科学省委託事業「平成 30 年初等中等教職員国際交流事業」の一環として、2018 年 6 月 3 日から 6 月 29 日に実施された中国政府による日本教職員派遣プログラムには、前年度に中国教職員の受け入れにご協力いただいた自治体や学校の教職員、日中間の教職員交流に高い関心を持ち、公募により選抜された教職員等、計 25 名が参加しました。

参加者は北京市で中国教育部による同国の教育事情や制度について説明を受けたのち、甘粛省蘭州市と上海市での教育行政機関、学校および教育文化施設等の訪問を通して、中国における教育の現状と課題、訪問都市の教育の特徴、及び両国における教育課題の共通点と相違点について学ぶとともに、中国の教職員、児童生徒との交流を図ることができました。このたびの訪問が、中国の教育や文化に対する参加教職員の理解を深めることはもとより、帰国後の諸活動を通じて日中の教員間、学校間の交流のいっそうの発展に役立つよう願ってやみません。

最後に、このプログラムにご支援とご協力をいただきました、中国教育部、中国駐日本国大使館、文部科学省、及び、中国教育国際交流協会、甘粛省教育庁、上海教育国際交流協会、訪問先の各学校をはじめ、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

2019 年 1 月

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

目　次

１．プログラム概要･････････････････････････････････････ 5

２．実施内容・訪問記録･････････････････････････････････ 15

３．成果と今後への活用･････････････････････････････････ 29

Ａグループ･･･ 29

Ｂグループ･･･ 40

事業担当者コメント･････････････････････････････････ 51

付録　プログラム写真･･････････････････････････････････ 55

過去のプログラム実績･･････････････････････････････････ 59

１．プログラム概要

プログラム概要

1. 実施の背景

ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現をミッションとし、教育と文化の分野において地域協力・交流活動を推進する団体として、文部科学省の委託のもと初等中等教職員国際交流事業を実施します。

初等中等教育にかかる日中間の国際交流事業としては、2002 年より国際連合大学が文部科学省の協力のもと、ACCU を委託機関として「国際教育交流事業」の一環で実施してきた中国教職員の招へいプログラム、および 2003 年に開始し 2007 年からは中国教育部の招へいにより実施されてきた日本教職員の中国派遣プログラムがあります。このたびの「中国政府日本教職員招へいプログラム」はこれらの事業を後継し、互いに学び合うことにより日中間の交流をさらに深化させることを狙いとしたプログラムです。

2. 目的・期待される成果

本プログラムは、日本の教職員を中国に派遣し、中国の教育・文化施設を訪問することによって相手国についての理解を深め、教職員との交流を通じ、日中両国の相互理解と友好を促進することを目的としています。

また、プログラムに参加する教職員には、プログラムでの学びあいを通して日中教職員間の持続的な相互交流を育むこと、学びを学校・地域・社会に還元し、教育現場で国際理解を推進する担い手となること、ひいては日中両国の教育の質を高めることなどが期待されています。

3. 活動内容

(1)中国の教育政策の現状と課題についての研修
(2)中国の教職員および児童生徒との教育現場での交流・意見交換
(3)学校および教育・文化施設の視察

4. 日程

出発前オリエンテーション：2018 年 6 月 2 日（土）
プログラム実施期間：2018 年 6 月 3 日（日）‐6 月 9 日（土）　（7 日間）

日付	日程	訪問先	活動
6 月 2 日(土)	前日（午後）	東京都内	出発前オリエンテーション ※中国の教育事情についての講義を含む
6 月 3 日(日)	派遣第 1 日目	北京市	東京（羽田）出発 北京首都国際空港到着
6 月 4 日(月) ｜ 6 月 8 日(金)	派遣第 2 日目 ｜ 派遣第 6 日目	北京市 甘粛省 上海市	中国教育部表敬訪問 訪問先自治体の教育委員会表敬訪問 学校訪問 教育・文化施設等見学
6 月 9 日(土)	派遣第 7 日目		上海出発（成田、関西、福岡へ） 日本の各地へ到着

5.参加者

下記の教職員、随行員、計 25 名程度の参加とする。

(1) 2018 年度中国教職員招へいプログラム受入れ予定の教育委員会が推薦する教職員
(2) 国際連合大学の主催により ACCU が実施した 2016-2017 および 2017-2018 年中国教職員招へいプログラムの受入れ教育委員会または受入れ校が推薦する教職員
(3) 公募により選抜された、日中間の教職員交流に高い関心を持つ自治体または学校の教職員
(4) 文部科学省、ACCU 職員

6. 参加資格

(1) 日本国籍を有すること。
(2) 過去に本プログラムに参加したことがないこと。
(3) 所属する教育長・学校長等から推薦を受けた、初等中等教育教職員（教育行政職員を含む）であること。特に、在職 3 年～15 年程度の教員が望ましい。（ただし、訪問団長・副団長はこれに限らない。）
(4) 将来にわたり中国との教育交流の推進に寄与できること。特に、中国との学校／教員／児童生徒／地域間の交流、または定期的な情報交換等を推進する立場にある者が望ましい。
(5) 健康で、オリエンテーションを含めたプログラムの全日程に参加が可能であること。
(6) 団体行動の規律を守り、主体性を持って積極的に参加ができること。
(7) 訪問先が日本とは習慣の異なる国であることを理解し、突然の変更などにも柔軟に対応できること。
(8) 日本国内にて、E メール使用して円滑に連絡を取ることができること。
※参加決定後は、参加者本人と直接連絡を取らせていただきます。

7.渡航費等諸経費

(1) 中国政府が下記について負担する。
- 中国国内の移動に要する交通費
- 中国滞在中の宿泊、食事
  ※中国政府から中国滞在中の全ての食事が手配される。日当は支給されない。
- プログラムの運営に必要な経費（通訳等）

(2) ACCU が下記について負担する。
- 日本（往路：羽田、復路：成田・関西・福岡のうち最寄り空港）と指定された中国の国際空港間のエコノミークラス航空券
- 日本国内交通費：オリエンテーション日の会場までの交通費および帰国日の到着空港からの交通費の定額（ACCU の規定に準ずる）
- オリエンテーション当日（6 月 2 日）の宿泊

注 1：オリエンテーション当日、開始時刻までに到着可能な交通手段がない場合に限り、前日（6 月 1 日）の宿泊費を支給する。
注 2：帰国当日中に居住地に到着可能な交通手段がない場合に限り、帰国当日（6 月 9 日）の宿泊費を支給する。
注 3：本プログラムは公務扱いでの参加となるため、日当は各所属先にて負担する。期間を通して ACCU から日当は支給しない。

(3) 各参加者の負担
- 海外旅行保険料：プログラム期間中の万一の事故に備え、出発前に必ず各自の責任において加入しておくこと。

- 上記（1)、(2）以外の諸経費

(4) 旅券と査証について

- 旅券（パスポート）：入国時に 6 ヶ月以上有効なパスポートを各自で準備すること。
- 査証（ビザ）：一般旅券の場合は、ビザの取得は不要。

8. 通訳

プログラム期間中は、日本語‐中国語間の通訳あり。

プログラム日程

日にち	時間	内容	宿泊
6/2(土)	13:30-13:50	オリエンテーション受付	ホテルビスタ蒲田 東京都大田区西蒲田 8-20-11 Tel：03-5703-5555
	14:00-17:40	オリエンテーション、ホテルチェックイン	
	19:00-21:00	懇親会	
6/3(日)	6:30	各自チェックアウト、ホテルロビー集合	北京西西友誼酒店 北京市西城区西単北大街 109 号 Tel：+86-10-59319898
	6:45	ホテル出発	
	7:30	羽田空港到着、チェックイン	
	14:35-17:00	羽田空港～北京首都国際空港 CA184	
	19:30-21:00	夕食	
	22:00	ホテル到着、チェックイン	
6/4(月)	8:00-8:40	各自チェックアウト、ホテル出発	甘粛飛天大酒店 （レジェンドホテル） 城関区天水南路 529 号 Tel: +8609318532888
	8:50-10:40	北京師範大学附属実験中学訪問 （学校訪問 1 校目）	
	10:40-11:40	中国教育部表敬訪問	
	11:50-13:00	昼食	
	13:00-14:00	北京首都国際空港へ移動	
	16:05-18:40	北京首都国際空港～蘭州中川国際空港 CA1221	
	18:40-21:30	移動・夕食	
	22:30	ホテル到着、チェックイン	
6/5(火)	8:30	ホテル出発	
	9:30-11:30	西北師範大学附属中学（高校）訪問 （学校訪問 2 校目）	
	12:00-13:30	昼食	
	14:30-17:00	北京第二実験小学校蘭州分校訪問 （学校訪問 3 校目）	
	18:00-19:30	夕食	
	20:00	ホテル到着	
6/6(水)	8:00	ホテル出発	
	9:40-11:30	甘粛省衛生職業学院訪問 （学校訪問 4 校目）	
	12:00-12:30	昼食	
	15:00-17:30	蘭州市特別教育学校訪問 （学校訪問 5 校目）	
	18:00-19:30	夕食	
	20:00	ホテル到着	

6/7(木)	8:00	ホテル出発	甘粛飛天大酒店 （レジェンドホテル） 城関区天水南路 529 号 Tel: +8609318532888
	8:30-11:30	甘粛省博物館見学	
	12:00-13:30	昼食	
	14:00-15:30	敦煌研究院見学	
	15:40-17:30	水車博覧園見学	
	18:00-19:30	夕食	
	20:00	ホテル到着	
6/8(金)	5:00	ホテル出発	上海緑地普陀 Holiday Inn Express 上海市光復西路 843 号 Tel：+86-21-61421818
	5:00-6:00	蘭州中川国際空港へ移動	
	7:20-10:15	蘭州中川国際空港～浦東国際空港 MU719	
	12:30-13:30	ホテルチェックイン・昼食	
	14:00-16:45	上海第一師範学校附属小学校訪問 （学校訪問 6 校目）	
	17:00-17:15	東方明珠タワー見学	
	17:15-19:00	夕食（東方明珠タワー内）	
	19:40	ホテル到着	
6/9(土)	9:30	ホテル出発	
	11:30	上海浦東空港到着 3 路線に分かれて帰国 上海浦東～関西　JL894　13:20–16:45 上海浦東～成田　JL876　14:00–18:00 上海浦東～福岡　JL5658　14:20–17:15	

【オリエンテーション講師】

文部科学省生涯学習政策局参事官（連携推進・地域政策担当）付
専門職　新井　聡

【中国側随行者・通訳】

北京通訳・全日程随行:
中国教育国際交流協会
プログラム・オフィサー　林　穎

甘粛省：
蘭州理工大学外国語学院　日本語学部
副教授　趙　付立

上海：
上海教育国際交流協会
朱　家儀

参加者リスト

A グループ

No.	氏名	所属	職名	担当係
A-01	関　光世	京都産業大学外国語学部（京都府）	教授	団長
A-02	安部　裕太朗	学校法人片山学園 片山学園高等学校（富山県）	教諭	記念品係
A-03	岩田　智文	江南市立西部中学校（愛知県）	教諭	記録係代表
A-04	川島　勇行	東京都立国際高等学校（東京都）	主任教諭	記録係
A-05	久保田　瑞穂	茨城県立高萩清松高等学校（茨城県）	教諭	記録係
A-06	二宮　浩司	福岡県立修猷館高等学校（福岡県）	教諭	写真係
A-07	笹井　哲朗	AICJ 高等学校（広島県）	教諭	記録係
A-08	白濱　小恵子	横浜市立横浜吉田小学校（神奈川県）	教諭	情報共有会係
A-09	高橋　諒子	横浜市立日枝小学校（神奈川県）	教諭	記録係
A-10	武田　和浩	桜美林中学校・高等学校（東京都）	教諭	庶務係
A-11	富樫　未来	徳島県板野郡上板町立高志小学校（徳島県）	教諭	記録係
A-12	生方　裕	文部科学省初等中等教育局児童生徒課	課長補佐	
A-13	高松　彩乃	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター 国際教育交流部	プログラム・スペシャリスト	

B グループ

No.	氏名	所属	職名	担当係
B-01	山﨑　貴雄	高知県立高知東工業高等学校（高知県）	教頭	副団長
B-02	阿部　紀子	横浜市立永田台小学校（神奈川県）	教諭	文化交流係
B-03	市橋　由彬	奈良教育大学附属中学校（奈良県）	教諭	記録係
B-04	菅野　広樹	学校法人自由学園（東京都）	教諭	写真係
B-05	窪津　宏美	横浜市立南吉田小学校（神奈川県）	主幹教諭	文化交流係
B-06	宮﨑　洋志	市立札幌大通高等学校（北海道）	教諭	情報共有会係
B-07	仲田　郁子	千葉県立流山おおたかの森高等学校（千葉県）	教諭	記録係代表
B-08	佐々木　稔	京都教育大学附属桃山中学校（京都府）	副校長	記録係
B-09	土屋　隆史	横浜市教育委員会事務局指導部国際教育課（神奈川県）	指導主事	記録係
B-10	矢吹　卓也	箕面こどもの森学園（大阪府）	小学部担当	記録係
B-11	吉田　智仁	桜美林中学校・高等学校（東京都）	教諭	記念品係
B-12	伊藤　妙恵	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター 国際教育交流部	プログラム・スペシャリスト	

プログラム関係機関

＜日本側機関＞

文部科学省/Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology of Japan

在中国日本国大使館/Embassy of Japan in China

日本国駐上海総領事館/Consulate-General of Japan at Shanghai

＜中国側機関＞

中国教育部/Ministry of Education, People's Republic of China

在日本国中華人民共和国大使館/Embassy of the People's Republic of China in Japan

中国教育国際交流協会/China Education Association for International Exchange

甘粛省教育庁/Education Department of Gansu

上海教育国際交流協会/International Education Association Shanghai

＜訪問校＞

北京師範大学附属実験中学/
The Experimental High School Associated to Beijing Normal University

西北師範大学附属中学/The High School Attached to Northwest Normal University

北京第二実験小学校蘭州分校/
The Lanzhou Branch of Beijing No.2 Experimental Primary School

甘粛衛生職業学院/Gansu Health Vocational College

蘭州市特別教育学校/ Lanzhou School for the Blind, Deaf and Dumb

上海師範学校附属小学/The Primary School Attached to Shanghai No.1 Normal School

＜企画・実施・運営＞
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター/
Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)

２．実施内容・訪問記録

6月2日（土）午後　オリエンテーション（東京）

文部科学省 新井専門家による中国の教育に関する講義

プログラムの前日、東京のホテルビスタ蒲田東京にてプログラムのオリエンテーションが実施された。

代表者の挨拶の後、文部科学省生涯学習政策局参事官（連携推進・地域政策担当）付専門職の新井聡氏より「中国の教育事情について」というテーマで講義が行われ、参加者が中国の教育概要と近年の教育改革等について学ぶ機会となった。

その後、ACCU 職員による日程の説明や参加者同士の自己紹介、中国の学校で披露する歌の練習などを通して参加者同士が互いに知り合い、翌日から始まるプログラムの準備を行った。

プログラム参加者の興味・関心

- 外国語教育の実施状況
- 少数民族に対する教育
- 国家の教育政策で育成したい理想の人間像
- 教育における伝統文化の継承
- 管理職、教職員の配置について
- 教員の資質向上、研修のあり方
- 中国語の指導を必要とする児童・生徒への支援
- 保護者を巻き込んだ教育活動
- 学校現場での ICT、プログラミング教育
- 教育格差について　等

講義「中国の教育事情について」Q&A（抜粋）

Q：沿岸地域の大都市では、農村からの労働者とその子弟が多くいると聞いたことがあるが、そのような子どもたちはどのような学校に通っているのか。
A：上海のような都市では地方から来て働いている人が多くいるが、働いている地域に戸籍を移していない場合、税金で運営費用が賄われているような学校では受入れができず、自分の戸籍がある省の人が作った私立の学校に入学するというケース等が考えられる。しかしながら、公立学校での受入れも少しずつ増えており、その後の進学や職業、専門的な道に進むための門戸も開かれてきている。

Q：海外への留学について、子どもたちの意識はどのようであるか。
A：都市部では、多くの子どもたちが海外留学に関心を持っている（留学が現実的である児童・生徒の数が増えている）。

6 月 3 日（日）日本出国・北京到着

6 月 3 日（日）に日本を出発した訪問団は、飛行機の大幅な遅れにより予定されていた天壇公園の見学はキャンセルとなったものの、中国教育国際交流協会との夕食会でさっそく中国の食の「おもてなし」を受けた。

日本語の堪能な李春生常務理事による乾杯の挨拶で始まった食事会では、北京ダックをはじめとしたたくさんの中華料理を楽しい会話とともに満喫した。

夕食会場での集合写真

6 月 4 日（月）午前　北京師範大学附属実験中学訪問（北京）

訪問スケジュール

時間	内容
9:00-9:40	校内見学
9:40-9:55	授業見学（中 1・高 1 英語）
9:55-10:15	挨拶・学校紹介

校内にある屋内プールの様子。両脇にはアスリートとして活躍する卒業生のパネルが飾られていた

学校・機関の特色

同校は北京師範大学の教育改革実践の場であるとともに、優秀な中高生を育成する模範高等学校の一つである。学校の特色として、国際理解教育を充実させるとともに、左の写真に見られるプールでの授業（中国では学校におけるプールの設置が日本ほど一般的ではない）をはじめとした体育教育を通して、健康で持続可能な成長を促す教育を実践している。このような実践は現在もすでに大きな効果をあげているが、さらなる発展を目指して「まじめな教育」という基本理念を教職員に徹底している点が強調された。

参加者の感想（抜粋）

訪問時間の関係上、質疑応答の時間は設けられなかったため、参加者の感想を一部紹介する。

・中学生から英語の授業がオールイングリッシュで行われており、生徒が一生懸命に授業に参加する姿が見られた。国内の難関大学のみならず、海外の大学にも進学するような生徒を育成し、恵まれた施設で教育を受けている姿が印象に残った。
・英語の授業を見学したが、英語を学ぶというよりも英語を使って考える・議論することに目標が設定された授業が展開されていたことが驚きであった。生徒には学力差があるようにも見えたが、できる生徒が議論を引っ張っていた。教室全体での議論で自信を持って英語で意見を言える生徒が印象的であった。
・卒業生の大部分が国内外の有名大学に進学しているエリート校であるが、大学進学ばかりでなく、全人教育を実践し、体育の授業も重視している。校長先生の打ち出された「まじめな教育」という方針は、教育の不易であると感じた。

6 月 4 日（月）午前　中国教育部表敬訪問・歓迎昼食会（北京）

中国教育部への表敬訪問

中国教育部では、国際司副司長の張晋氏より「日中友好 40 周年を迎え、両国間には様々な問題があるが教育から国際交流を行っていきたい」と歓迎の挨拶があった。その中で、日中韓三か国で行っている青少年の交流プロジェクトや、スポーツ交流などのプログラムに参加して交流を深めてほしいとの提案もあった。

その後、基礎教育司副処長の徐攀氏より中国の教育事情について説明を受けた。現在実施している 6 つの戦略として、①学校の整備（特に幼稚園・特別支援学校）、②各省のバランスのとれた発展、③素質教育（心の教育）、④教育の質の向上、⑤教員のチーム化を通して優秀な教員を確保すること、⑥ガバナンス力の向上を挙げた。地域による格差が大きいがそれを是正するため尽力していること、プログラム期間中に訪れる甘粛省蘭州市では地方の教育の状況を見てきてほしいとのコメントがあった。

Q&A（抜粋）

Q：プログラミング教育はどのように実施しているか。
A：基礎教育段階では、科学技術教育の一環として知識の紹介を行っているが、プログラミングそのものは実施していない。

Q：学校と保護者の関係、とりわけ PTA の活動状況について知りたい。
A：交流を重視しており、制服の選定から学校の運営にも PTA が関わっている。

Q：ESD に関してどのような課題や取り組みがあるか。
A：ESD と名前のついた項目はないが、授業内外で ESD の理念を取りこんだ実践を行っている。

Q：教育の地域間格差はどのように解消していっているか。
A：貧困地域には予算を多く配当するなどの政策を行っている。

Q：不登校の児童・生徒に対する支援について知りたい。
A：学校に通うことを目標として、保護者との面談などの機会を設けて対応している。

6 月 5 日（火）午前　西北師範大学付属中学訪問（甘粛省蘭州市）

訪問スケジュール

時間	内容
9:30-10:15	校内見学
10:15-10:40	授業見学（数学）
10:40-11:50	挨拶・学校紹介・教職員懇談会（甘粛省教育省・蘭州市教育局合同）

数学の授業風景

学校・機関の特色

同校は北京の「五城学堂」(1901) にルーツを持つ、実に 117 年という長い歴史のある学校である。現在は、全面的に素質教育を推進し、教育の質を常に向上し続け、甘粛省初等教育の改革をリードする役割を果たしている。「北辰」「鴻宇」「昌緒」「永蒸」「国際英才」「ケンブリッジ国際課程」という特色のあるクラスを持ち、文理を融合した教育を取り入れながら世界に向けて発展を遂げている。

Q&A（抜粋）

Q：生徒を集めるための広報活動にはどのようなものがあるか。
A：ホームページ（中国語・英語）のほか、QQ や WeChat などの SNS を用いたり、新聞や雑誌の取材を受けたりしている。在校生や卒業生が何らかの分野でよい成績や成果を出した際には、メディアに報道される。父兄会などの組織も宣伝の一旦を担っている。

Q：北京などの地域との格差を感じるか。
A：当校は蘭州の中心にあり、地理的にいえば中国の中心にあるともいえる。経済的には大都市に後れを取っている部分もあるが、教育理念は決して遅れていない。外国の学校とのつながりを持ち、その教育理念を取り入れていることも格差を感じない理由の一つである。

Q：多くの生徒が海外留学を経験するようであるが、奨学金など支援の仕組みを知りたい。
A：甘粛省の国際教育をリードする「国際英才」クラスを設置しており、そのクラスに対して国からの補助金が出ている。良い成績を出すと追加の補助金がもらえることになっている。

Q：ロボットを作っている生徒がいたが、どのような専門を持つ教員が指導しているか。
A：その生徒たちは、北京で実施されるロボコンに出場する準備をしている。指導教員は物理やコンピューターを教えている教員のほか、大学からロボットの専門家を招くなど外部の指導者を招くこともある。

6 月 5 日（火）午後　北京第二実験小学校蘭州分校訪問（甘粛省蘭州市）

訪問スケジュール

時間	内容
14:30-16:30	児童のガイドによる校内見学
16:30-17:00	学校紹介・懇談会

ガイド役の児童による学校紹介

学校・機関の特色

同校は蘭州市教育委員会、市政府と北京第二実験小学校が共同で設立した全日制の小学校である。「以愛育愛（愛をもって愛を育てる）」という理念のもと、蘭州教育の特色と地域文化を融合し、校訓「愛慧博遠」を中心とし、学校理念、学校行為、学校環境の 3 つの面から、学校の愛慧文化建設システムを構築している。教育理念として掲げる「以愛育愛」に関しては、教師からの愛がこどもに影響し、学校生活を通して愛を実感できるようにしたいと考えており、また教師は指導の主体であり、児童は学習の主体である。

Q&A（抜粋）

Q：外国語をどのように学んでいるか。
A：中国では 2010 年の 8 月から週に 3 回外国語の授業を実施している。当校では、絵本を使った学習をしている。英語のお祭りなどのイベントも行っており、ロゴや旗、スローガンを児童から募集する。また、週に 1 回、国旗掲揚の際に英語の成績が優秀な児童が英語のスピーチを行う機会を設けている。児童を学習の主体とし、英語を話したいという気持ちを持ってほしいと考えている。

Q：給食はあるか。
A：蘭州で唯一給食制度のある学校である。北京第二実験小学校の分校として、北京の本校に合わせている。蘭州のきまりで、小学生が学校にいる時間は 6 時間までとされている。8 時 45 分から 15 時 45 分までを学校で過ごし、昼の休憩は 1 時間 20 分取っているが、蘭州の他の学校のように、家に帰って昼食をとるほどの時間の余裕がないということもあり、給食を設置することとなった。

Q：人気がある学校だと思うが、入学のための条件は何か。
A：学校の所在地である蘭州市安寧区に住民票と住宅があることが条件であり、コンピューターで無作為に選んでいる。入学希望が偏ることは、学校のみならず中国全土の問題であり、これからも深刻になると考えられる。

6 月 6 日（水）午前　甘粛省衛生職業学院訪問（甘粛省蘭州市）

訪問スケジュール

時間	内容
9:40-9:55	バスでキャンパスツアー
10:00-10:15	挨拶・学校紹介
10:15-11:20	懇談会
11:20-12:30	学食にて昼食

学校紹介の様子

学校・機関の特色

甘粛省教育庁の管轄下にある、甘粛省衛生学校を前身とした全日制の職業学校である。2017 年 9 月に蘭州中川空港近隣でテクノロジーの中心地として開発を進めている新区へとキャンパスを移動した。同校は職業学校であり、中学卒業後に入学して高校段階の学業を含む 5 年のカリキュラムを通う一部の生徒を除き、大多数が高校卒業後に入学し 3 年間で卒業する。医師ではなく、医師のアシスタントとしての専門家を養成する短大に近い存在である。新キャンパスは大学のように広く、医学関係を中心とした機器や設備が充実している。同校に通った生徒の卒業後の進路としては、進学のほか甘粛省内での就職が一般的で、希望する就職先で働けるようマッチングも行っている。

Q&A（抜粋）

Q：外国の学校を卒業した子どもが入学することは可能か。
A：省内に戸籍がある場合のみ、入学試験を受けることが可能。

Q：卒業後の進路について知りたい。
A：インターネットを介したマッチングシステムがある。甘粛省内での就職が多いが、それ以外の地域への就職も可能。医療機関以外の工場などに就職する場合も実際にはある。

Q：15 歳（中学卒）での入学と、18 歳（高校卒）の入学について、割合やカリキュラムの違いについて知りたい。
A：3,500 名のうち、3,000 人が高校卒業後に入学、中学卒業後すぐに当校に入学する生徒は 500 名と少ない。カリキュラムは別で、15 歳で入学した生徒は 5 年間、18 歳で入学した生徒は 3 年間をかけて卒業する。修了時に取得できる資格はどちらのケースでも同じである。

６月６日（水）午後　蘭州特別教育学校訪問
（甘粛省蘭州市）

訪問スケジュール

時間	内容
14:30-16:00	校内見学・授業見学
16:00-16:30	児童・生徒との交流 （パフォーマンス発表）
16:30-17:30	挨拶・学校紹介・懇談会

訪問団による歌の披露

学校・機関の特色

全国に 15 ある情報技術実験校の一つで、視覚障害・聴覚障害をもつ児童・生徒がともに学んでいる。多くが校内の寮で生活し、週末に自宅に帰って家族と過ごすという形態をとっている。同校は「感謝の気持ちを育てること」を大切にしており、親に対しても自分ができることをしてあげるよう指導している。大きな祝日などには手紙によって感謝の気持ちを伝えることもしており、学校でも目の見えない生徒と耳の聞こえない生徒が助け合えるよう、愛をもって育てている。

Q&A（抜粋）

Q：視覚障害と聴覚障害の児童・生徒が１校に集まっているのは珍しいのではないか。
A：別の学校で受入れるケースも多いが、この学校では、子どもたちの感謝・恩返しの気持ちを育てるという目的もあり、一緒に受入れている。異なる障害を抱えた子どもたちが、お互いに助け合い、補い合うことで大きく成長する。

Q：近隣の学校との交流状況について知りたい。
A：地域のイベントなどを通して交流を行っているが、日ごろから定期的に行っているものではない。学習支援など、大学生のボランティアとの交流は活発。特別支援学校同士の交流はあまりない。

Q：卒業生の進路について知りたい。
A：一部の生徒は大学に進学する。大学卒業後は、学校でも雇用の枠を設けている。経済的な事情がある者を含め、進学をしない生徒は就職するが、天津にある企業と提携を結び、インターンシップとその後の就職支援を行っている。

6月7日（金）午前　甘粛省博物館見学（甘粛省蘭州市）

「馬踏飛燕」の見学

甘粛省博物館は1956年に創立され、歴史文物・近現代文物・民族文物や古生物化石・標本など合わせて35万件以上を所蔵する大規模な博物館である。

とりわけ「馬踏飛燕」という置物が有名であり、甘粛省のあらゆるところにレプリカが置いてある中国観光業のシンボルとなっているが、本物を目にすることができて訪問団はその美しさに圧倒されていた。前半は解説を聞きながらの見学し、後半は各自関心のある展示を見て回り、中国の歴史を考えることのできる有意義な時間であった。

6月7日（金）午後①　敦煌研究院見学（甘粛省蘭州市）

ICT機器を用いた展示の様子

甘粛省の北西部に位置する敦煌には、莫高窟をはじめとした有名な史跡がある。今回訪問した敦煌研究院は、蘭州市内における敦煌学研究施設かつ敦煌関連の文物管理を行う場所でもある。

訪問団は係員の説明を聞きながら研究院内の石窟内を再現した部屋や仏像、壁画などを見学した。VR を使用した石窟内の再現を体験した参加者は、蘭州にいながらして莫高窟の中を歩いているかのような感覚に驚きの声を上げながら敦煌の歴史を体感していた。

6月7日（金）午後②　水車博覧園見学（甘粛省蘭州市）

脚で漕ぐ力で水車を動かす装置

黄河が流れ「水車の都」とも呼ばれる蘭州に建設された水車博覧園は、50年前に林立された黄河両岸水車の壮観な景色を再現し、世界で水車の種類も数も最も多いといわれるテーマパークである。黄河のほとり、約1kmにもわたって大小さまざまな形、粉挽や脱穀など多様な用途に使われていた水車が展示されており、参加者は雄大な黄河と調和し美しくも迫力満点の水車群を観察した。園内には水車を動かす体験ができるコーナーがあり、参加者は協力して水車を動かすなど楽しみながら、この地域の昔の人々の暮らしに思いを馳せていた。

６月８日（金）午後①　上海師範学校附属小学校訪問（上海市）

訪問スケジュール

時間	内容
14:15-15:50	校内見学
15:50-16:45	挨拶・学校紹介・懇談会

高学年の児童のための図書館

学校・機関の特色

上海第一師範学校付属小学校は、著名な教育家である陳鶴琴氏が 1945 年に創立した実験性の学校である。80 年代、同校は陳鶴琴氏の「生きる教育」の思想のもと「愛、美、興味、創造」を中心とした「愉快教育」実践を推し進め、国家教育委員会において成功例として評価された。現在全国で 90 箇所を超える学校が愉快教育の取り組みを行っている。

同校は施設が非常に充実しており、特に訪問団の注目を集めたのが「低学年と中・高学年で２つ作られた図書館」であった。低学年の図書館は汽車を用いたデザインで、汽車が本棚や読書スペースになっていた。高学年の図書館は落ち着いたデザインだが、滑り台など遊び心が見られるものもあった。どちらの図書館も週末は親子で利用することが可能であるなど、学校の工夫が感じられた。

Q&A（抜粋）

Q：掃除や植物の水やりなどを、児童が担当することはあるか。
A：傘の管理や弁当箱の回収、植物の水やりなどの係を設けている。担当の希望を出すことができ、1 ヶ月ごとに表彰を行っている。

Q：教員の勤務状況について知りたい。
A：人によるが、週あたり 32 コマの授業と、授業外の補習を担当している。

Q：授業で ICT 機器をどのように使っているか。
A：コンピューターの授業以外では、中国語や数学などの科目で教員の希望がある場合に使っている。用途は調べ学習などが中心。

Q：1 年生の最初の 1 ヶ月は、就学前教育からの移行期間というが、どのようなことを行っているか。
A：生活・学習習慣をつけることを目的として、先生や同級生と仲良くなるためのウォーミングアップの時期と位置づけている。

6 月 8 日（金）午後②　東方明珠見学・夕食（上海市）

東方明珠は高さ 468mを誇るテレビ塔で、浦東にそびえる上海のシンボルでもある。球体部分が展望台となっており、どの展望台からも周囲 360 度がぐるりと見渡せる。

訪問団は、エレベーターで展望階へと移動し、展望レストランで本プログラム最後の夕食をとった。

残り少ない時間を惜しみながらプログラムの思い出を語り合うとともに、上海の夜景を楽しむ時間となった。

6 月 9 日（土）中国出発・日本到着

6 月 9 日（土）訪問団は福岡空港・関西国際空港・成田国際空港に向かう 3 便に分かれて帰路についた。

空港に向かうバスの中では、訪問団一人ひとりが一週間の思い出を話しながら、この経験を今後の教育活動に生かしていこうと語り合った。

東方明珠前での集合写真

３．成果と今後への活用

A-01　関　光世

（京都産業大学教授）

（写真左）

「知識のバージョンアップが急務」

私は大学教員として、中国語を母語とする中国語専攻生に接する機会があり、教室の内外における対応に参考になればと考え、本プログラムに参加させて頂きました。

参加者の中には、中国に関わる児童生徒が複数在籍しているクラスを担当されている先生方がおられました。大学生とは違って日々の生活指導や保護者対応など御苦労もおありだと思うのですが、細やかな指導を厭わず、コミュニケーションを図るために中国語を学ばれるなど日々奮闘されるというお話に大変感銘を受けました。大学では彼らを放任してしまいがちですが、小中高校で御尽力された先生方からバトンを受けとったと考え、しっかりと育てて社会に送り出す責任があると、これまでの認識の甘さを反省した次第です。先生方に出会えたことは、間違いなく本プログラムで最も有意義であった点だと言えます。

また、訪問先では私自身の中国の学校教育に関する知識がいかに古いものであるかを思い知らされました。特に小学校で「愉快な教育」、「愛で愛を育てる」という理念に接した時には、にわかには信じがたいほどの衝撃でした。さらに 20 年ぶりに再訪した蘭州の変貌にも驚きました。早急に自身の中国に関する知識や理解を 21 世紀仕様にバージョンアップする必要があると感じました。初心に返って学び直す必要を感じています。

今後の活動予定

●プログラム参加中に撮影した写真を今回の研修の行程に沿って整理し、自身が担当する各授業において、日本語或いは中国語で紹介することから始め、その後は各都市の街並み、大学入試統一試験の日の様子、訪問先学校での授業風景や学生の姿、各土地の料理などのテーマごとに分類し、背景知識の蓄積を目的とした教材を作成したいと考えています。

●初心に返って中国を見直したい。

仕事の関係で年に 2 回は訪中していますが、近年内陸の地方都市を訪れる機会はほとんどありませんでした。今回約 20 年ぶりに蘭州を訪問し、その変化を目の当たりにし、学生に今の中国の姿を正しく伝えるために、もう一度初心に返って中国各地を回り、現在の中国を体感し、自身の知識を 21 世紀仕様にバージョンアップする必要があると痛感しました。

●中国留学に向けて学生の背中を押してあげたい。

本プログラムでの経験を学生に伝えることで、中国留学に二の足を踏む学生の背中を押して、在学留学に踏み出してもらいたいと考えています。

A-02　安部　裕太朗

（片山学園高等学校教諭）

「常識とは 18 歳までに身につけた偏見のコレクションのことをいう」

タイトルは理論物理学者であったアルベルト＝アインシュタインの言葉である。私は今回の中国派遣において、この言葉を痛感することとなった。中国はわが国の約 25 倍の国土をもち、人口も 14 億人を超える。この広大な国土と巨大な人口がゆえに、政府主導の教育改革は困難を極めていた。とりわけ人口の多さにおいては、熾烈な受験競争を生み出し、その弊害が取り沙汰されることも多かった。しかし、逆説的に言えばこの 14 億という人口に埋もれない為に、自らの長所を磨き、他者を寄せ付けない圧倒的な個性を伸長させる「エリート教育」が展開されているのも中国の教育である。「長所を伸ばす」中国と「短所をつくらない」日本の教育。両者ともに功罪はあるが、今回の派遣で最も深く考えさせられたテーマであった。古代ギリシアの哲学者であったソクラテスは「無知の知」という言葉を残している。物事は深く知れば知るほど、自らがいかに無知であったかということに気付かされる。この矛盾に似た知的好奇心をこれからも忘れず、自らの知見を学校教育に還元していく所存である。

今後の活動予定

●私が担当する高校世界史・現代社会では一つの事柄を学ぶ際に「他国比較」を実施している。物事はひとつの側面からではその本質を見抜くことは難しく、他国と比較することでその事柄の長短に気付くことができる。これまでの授業で比較対象にしていたのは往々にして欧米の国であった。生徒たちにとって「外国＝欧米」というイメージがあるからだ。いや、単に私にそのイメージがあるからかもしれない。欧米以外の国を出した際には「で、イギリスでは？」「で、アメリカでは？」という話になる。今回の派遣を通して、この他国比較の際には「アジア圏」「欧米圏」など複数の国を挙げて行いたいと思っている。それが生徒たちに誤った価値観、「欧米偏重のグローバル化」を植えつけない一つの方法だと思っている。

●近隣にある国際交流が活発な大学と連携し、国際交流を行なっていきたい。富山県にも多くの留学生がいるが、その多くはやはり韓国・中国などのアジア圏からの学生である。これまでも交流は行っていたが、単発で終わっていた経緯がある。また「韓国語（中国語）が話せないから」「韓国や中国にはネガティブなイメージがある」などと生徒たちがこの交流に前向きではなかったことも交流が継続実施されなかった要因の一つでもある。今回の派遣を通して、偏見や思い込み、先入観がいかに自らの世界を狭め、愚かな思考であるのかを実感できた。前述のような思考の改善の為には「交流」が最も重要な方法である。教科内だけではなく、総合的な学習の時間なども活用し、実践していきたい。

A-03　岩田　智文

（江南市立西部中学校教諭）

（写真左）

「実験中心！？」

タイトルから何を想像しましたか？？中国では理科の実験ばかり行っているのでは・・・と想像した人が多いかと思いますが、私が見てきた中国の学校は、理科の学習を中心とした学校ではありません。「実験中心」とは、西北師範大学附属実験中学のある施設の名前です。日本語で「ちゅうしん」と読んでしまうとイメージが湧かないかと思いますが、英語で「センター」と読むとイメージが湧くかと思います。中国語で外来語を漢字で表現する時に美しさを感じずにはいられません。「可口可乐」や「培根」「力保美达」など、何を表しているのか、想像力をかき立てるような漢字が当てられています。話は、「実験中心」に戻りますが、私が感銘を受けたのは、西北師範大学附属実験中学にある「実験センター」と呼ばれる施設です。プログラミングだけでなく、ロボット工学を学ぶための教材教具が充実した施設がありました。そこで生徒たちはロボットコンテストに向けて、ロボットを作り出したり、どんな動きにさせるのかプログラムを作成したりと、楽しく学んでいる様子でした。西北師範大学附属実験中学だけでなく、訪れた訪問先には STEAM（STEM）教育を意識した部屋があり、児童生徒はそこで最新のテクノロジーに触れながら、学習をしていた。日本は環境整備をし始めている最中なので、いつか日本の公立中学校にもこのような施設ができ、生徒自らが学ぶ姿がみられる日が来ることを願っています。

今後の活動予定

●見聞きしたこと・体験したことを写真や動画を活用しながら、関わる生徒に伝えていきたいと思います。クイズ形式で楽しく伝えられるように工夫し、少しでも多く中国の文化や国民性を伝えたいです。併せて、どの国でもいいので海外へ行き、異国文化を経験することで自分自身の視野が広がることを伝えたいです。外国語でコミュニケーションをとる難しさはあるが、果敢に海外へ出ていくことを進めていきたい。また語学の勉強だけでなく、異国の文化に触れ、異国の文化を学ぶことで、自国の文化へ目を向けなおすきっかけにもなるので、文化的な内容にも触れ、生徒に中国の良さを伝えていく。

●教員に対しては、中国の教育事情を中心に伝え、中国教育のよい点・悪い点などをともに考察し、日本に足りないもの、今日本が取り組まなければならない教育とは何かを模索していきたいです。学生の勉強に対するモチベーションは大きく差が開いているので、この現状を伝え、学ぶことへの意欲を高めるような活動を行なっていきたい。また、海外の研修へ参加することによって、日本の教育の良さに改めて気づくことができるので、他の先生方へも海外の学校を視察する意義を伝えていきたい。

A-04　川島　勇行

（東京都立国際高等学校主任教諭）

「教育格差に取り組もうとしている中国」

首都北京をはじめ、上海など沿海部の大都市の学校と同レベルの学校設備、また、そこで行われている教育内容や教員養成システムを西部の内陸地域へとひろげ、教育格差に取り組む中国。今回、北京や上海で訪問した高校や小学校は広大なキャンパスや充実した施設。また、それぞれの施設に教育目標や理念がこめられていることを知った。一方、内陸の蘭州ではその教育目標や理念を共有し、設備の充実面では国家プロジェクトのひとつとして、莫大な予算をつぎ込み、最新の設備を整え、地域の人々の教育にあたっていることを認識することができた。そこには経済成長をし続ける中国の経済力の勢い、広大な有り余る土地、それを作り上げる多くの人々、社会主義国としての国家の推進力のようなものを感じた。内陸で都市開発が進み、教育面も充実してきた地域、一方すでに富裕層が暮らす上海。しかし、地方でも開発された都市は豊かになるが、そこから外れた郊外は取り残されてしまうとか…。問題は一筋縄ではいかない。そのような中国も国際化のなかで地方都市から留学に出ていく生徒もいれば、上海などでは海外帰国生もいるとか。今回のプログラムであらためて中国のスケールの大きさを知った。また、国際化、多様化してくるなか、中国がどのような教育を行いたいのか、理想のようなものを感じることができた。今後さらに中国の先生方と交流を通して文化交流ができたらと考える。

今後の活動予定

●授業を通じて生徒たちに中国のリアルな様子を伝えたい。また、中国を理解することでどのような関係を築いていけばよいのか考えることを生徒たちに勧めたい。今回出会えた人々とこれからもコンタクトをとり、交流をつづけていけたらと思う。

●日本各地の先生方と出会えたので、今後の教育実践や情報収集等様々な機会を通してコミュニケーションをとり続けていきたい。

A-05　久保田　瑞穂

（茨城県立高萩清松高等学校教諭）

（写真手前右）

「中国のダイナミズムを肌で感じた一週間」

日本ではいまだに中国に対するステレオタイプが幅を利かせている。中国製品は粗悪でとるに足らないもの、中国人観光客は粗暴で洗練されていないといった見方はマスメディアを通して再生産され続け、それが私たち日本人の中国観を相当部分で規定する。「パクリ商品」や「爆買い」などの言葉が使われるとき、我々日本人は意識的か無意識かの違いはあれど大抵は中国を見下している。大人がこうしたレッテル貼りに慣れてしまえば、子どもたちが自分の目で中国を真摯に理解しようとする契機を奪うことになる。私はこのような問題意識を持って今回のプログラムに参加した。そして、実際に中国を体験し感じたことは、やはり中国は偉大で多様、そして急速に変化している国だということであった。今回のプログラムでは中国の教育の最先端を見せて頂いた。それらは「表向き」の見学であったことは否めない。しかしそれでも、中国の初等中等教育の現在を生で見ることができたことは私の財産である。そして、一週間の訪問では中国についてほんのわずかしか知ることができないことも痛感した。この「まだ知れていない」という感覚を得たことも財産である。

今後の活動予定

●「地理 A」の授業で中国訪問での見聞を紹介する。また同僚教員に対しては報告書を共有することを通して本プログラムで得た経験を伝える。

●今回のプログラムで知り合った中国の学校教育関係者の中でメール連絡を取ることができた方々とのつながりを保つことで、今後の生徒間交流などにつなげていきたい。

A-06　二宮　浩司

（福岡県立修猷館高等学校教諭）

（写真左）

「中国教育の不易と流行」

本プログラムで初めて中国を訪問させていただきました。中国で一体今どのような変化が起きているのか、学校現場ではどんな教育が行われているのか、中国の真の姿をこの目で見てみたいという想いで参加しました。小中学校など、さまざまな学校を視察した中で、特に印象に残っていることは、社会主義国家建設の中で、疎んじられてきた儒教が、現代中国で再評価されていたことでした。実際、視察した北京と蘭州の中学校では、どちらも立派な孔子像が校内に祀られていました。また、小学校の図書館にも儒教関係の書籍が多くみられ、儒教が学校教育に様々な形で取り入れられているように感じました。

一方、予想通りだった点もいくつかありました。例えば大学進学熱の高さです。優秀といわれる小学校や中学校の近くに住みたがる人が多く、地価が高騰するといった話や、ちょうど訪問中に実施されていた「考試」では、試験会場に遅刻しそうな学生を警察の車両やバイクが送り届けている光景を目にしました。「科挙」の伝統が残っている中国では、学歴は日本以上に重視されているように感じました。

今回視察させていただいた 4 校の小・中学校は何れも実験校や重点校ではありましたが、何れも優秀な教師陣と立派な施設を擁し、国家を挙げて人材育成に取り組む姿勢が伝わってきました。特に、北京師範大学附属実験中学の視察では、知育に偏ることなく全人教育を重視している点など、本校の教育目標と重なる部分も多くあり、今後の教育活動に向けて新たな知見を得ることができました。

今後の活動予定

●本プログラムで学んだことや体験したことを、授業や総合的な学習の時間などにおいて紹介していく予定です。特に私の専門である地理の授業では、現地で撮影した写真や映像を利用ながら、中国の自然環境や産業、文化、社会など、この目で見てきた現在の中国の姿を紹介し、生徒の中国への理解や興味・関心を高めていきたいと思います。また、本校の教職員に向けては、校内研修会で本プログラム報告し、得られた成果を教職員にも還元していく予定です。

A-07　笹井　哲朗

（AICJ 高等学校教諭）

「中華人民共和国の圧倒的なスケールと愛国心」

今回、自身が中高一貫校の教員という事から、中国の中学・高校の視察をメインに考えていたが、衝撃的だったのが２つの小学校訪問だった。北京第二実験小学校蘭州分校と上海市第一師範学校附属小学校に訪れたがその２つに共通している事が３つある。一つ目は圧倒的な施設の充実である。紙とペンという従来のスタイルだけでなく最先端技術を駆使した教育素材を惜しみなく配置しあらゆる角度から学習のアプローチができるところだ。二つ目に新しい英才教育である。英才教育というと教科の詰め込み式を思い浮かべるが、前述した多彩な教育素材を生かしながら学問だけでなく、芸術や伝統をも幼い頃から真剣に取り組ませ、非常に高いレベルにあると感じた。またその優秀さを前面に押し出し積極的にアピールすることによって、生徒たちも競って励んでいる様子だった。三つ目に愛国心を育む数多くの掲示物や先生方の言動だった。中国の最先端の教育に誇りを持ち、国家に感謝し、国家のために力を尽くす、また生徒たちも国家の発展のためにというところが非常に伝わってきた。

深い内容までは学ぶことはできなかったが、中国の教育は広くこのような方針の下に多数の民族の違いを越えて、一定方向に進んでいる力強さを感じずにいられなかった。

今後の活動予定

●今回各種学校で私が学んできたことを、総合学習の授業等で広く生徒に事実として認知してもらおうと考えている。

私が見たものは一部だが、実際に見た衝撃は、言葉に真実味を帯びていると思う。インターネット等で情報は飛び交っており、中国を知っているつもりになっていたが、想像をはるかに超えた中国の発展に驚愕した。その気持ちを共有したい。

そして世界のライバルたちの真剣さを本校生徒たちにも見習ってもらいたい。さらに進学先や学習能力だけでなく、勉強に向かう姿勢や個々人のためだけでなく人々に貢献しようとする気持ちなど取り入れたいところはたくさんあるので、都度この話をして少しでも生徒の役に立ちたいと考えている。

A-08　白濱　小恵子

（横浜市立横浜吉田中学校教諭）

（写真右から二人目）

「切磋琢磨」

子どもたちの支えあう姿が強く印象に残っている。「加油(がんばれ)！加油(がんばれ)！」と声を張り上げて、仲間を一生懸命に応援する姿。耳の聞こえない子どもたちが目の見えない子を案内する姿。そのそばには、支える教職員の姿があった。中国での研修を通して、我々が教育への情熱と向上心をもってたゆまぬ努力を続ける大切さを改めて感じた。子どもたちの秘めた無限の力をどうやって引き出していくのか、その課題はどこの国でも同じであり、共有できる課題である。教職員が切磋琢磨しながら、教育の向上を目指し続けること。異なるものもお互い認め合い、誰とでも支えあう姿勢を、子どもたちのそばにいる大人として示していきたい。

今回の研修では、現場の先生はもちろん、中国教育部、甘粛省教育庁、蘭州市教育局、通訳の方々、みなさん温かい「おもてなし」をしてくださった。自分が学んだことを発信していくことで、少しでもその心に報いたい。このような研修に参加できたことを心から感謝している。

今後の活動予定

●教職員への研修報告を実施。重点を置きたい点は、中国の教育の変化、発展を伝えることだ。本校は中国から転入してくる生徒が多く、中国では成績の良くない子は教室の後ろのほうに追いやられ、ほとんど面倒を見てもらえなかったという話を聞くことも少なくない。また、音楽や美術などの技能教科はほぼ実施されず、来日した子たちの多くが戸惑いを見せている現状がある。今回見学した中国の学校が体育に力を入れたり、個々の力を伸ばすために、多種多様な取組をしたりしていたことを具体的に報告したい。北京や上海などの都心部ではそれが一般的になりつつあるということを共有し、本校の今後の方向性を見据える土台としたい。

●地域へのさまざまな発信を試みたい。本校は海外の人が９人に１人いる地域のため、住民地域の人からもさまざまな意見があがる。今回の研修直後に開かれた地域との懇談会でも、さまざまな課題があがった。夜遅く公園で、大声で話している姿が見られるというのもその一例である。話を進めていくと、家で話すと近所迷惑になるので、外の公園で話している側面があることも分かった。話し合うことで、理解しあえることもある。なるべく、そのような場所に参加し、自身の理解を深めるとともに、いずれ場を提供する側の一助となりたい。

A-09　高橋　諒子

（横浜市立日枝小学校教諭）

（写真中央）

「『個性を尊重する』ということ」

本プログラムは、様々な教育機関や、教育庁の訪問のみならず、中国の気候や土地の様子、食や街並み、人々の様子など、中国の文化にどっぷりと浸ることができる７日間でした。特に甘粛省蘭州市は、私がこれまで知る機会が全くなかったものですから、今回の訪問で初めて自分の中の生きた知となりました。

中国の学校を廻るにあたり、特に感じたことは、みなさん一人一人の児童生徒を愛し、それぞれの個性を認めて、様々な方面で活躍させているということです。まさに「個性を尊重」していると言えます。中国といえば、社会主義の国であり、初めは「皆が画一的に育てられる」というイメージを持っていましたが、思想こそあれど、教育に関してはそれぞれの児童生徒の興味関心から、一番伸ばせるところを十分に伸ばしているように見えました。今回訪問した学校には、そのための施設がたくさん揃っていて、子どもたちはこの環境でぐんぐん吸収していくのだと思いました。おそらくこれは最先端の学校の試みであり、中国全土で、とはまだならないのでしょうが、いずれは広まっていき優れた人材がどんどん育って行くことと思います。

まだまだたくさんのことを知っていきたいと思った訪問でした。ぜひ、また中国へ訪れたいです。谢谢。

今後の活動予定

●子ども達の学校での過ごし方を見学することができ、日本と違うところを見つけました。例えば、水筒一つとっても、中身が温かいか冷たいか、飲むタイミング、置いておく場所、は日本と中国で違いました。トイレや、掃除、食事に関してもそうです。私たちが知っているのは日本の学校のルール（慣習）でしかありません。違いは文化であり、優劣をつけるものではありません。どちらかに合わせないといけないわけでもありません。ここで得た知見を校内において報告し、違いを否定することなく認めていくことを、他の教員間に広めていきたいと思っています。

●現任校に着任して以来、興味関心から中国語を学び始めましたが、時間が経つにつれ「中国語のスキルは必要とされている」と痛感しています。今後はますます中国からの編入児童、家族が増えてくると予想されています。教職員だからという理由なく、国際都市横浜に住む一個人として、今後も外国の方々と積極的に交流していきたいと思っています。そのためには相手を理解し認める姿勢を常に忘れないようにしていきます。

A-10　武田　和浩

（桜美林中学校・高等学校教諭）

（写真右端）

「中国教育から学んだこと」

私は今回の研修を通して二つのことを学んだ。まずはグローバル教育に力を入れている学校とはどのような学校か、ということである。教員が、留学プログラムを充実させ、グローバル教育に力を入れていると謳うことでグローバルな学校には決してならないのだろうなと感じた。結局、グローバルな学校かどうかというのは、その学校に通う生徒たち自身が作り出すものだということである。海外進学など卒業後に彼らがどのように活躍するかが重要だと感じた。そのため、やらされるのではなく、生徒たちが自主的に取り組めるような環境を整える必要があるのである。二つ目に学んだことは、良い教育には生徒(児童)にも教員にもゆとりが必要だということである。生徒たちは座学の授業だけでなく、芸術やロボットなど個性を磨く授業も多く受けていた。きっと自分の好きなことを見つけやすいのではないかと感じた。教員の方も、とある学校では教員研修が必修になっていた。授業が早く終わる日があり、研修に行ける時間を作っているのである。日本の教員はとにかく日々の仕事に追われているため、なかなか自分磨きの時間が取れていないように思う。良い授業を提供するためにも、教員にも余裕が必要なのではないだろうか。

今後の活動予定

●帰国後、すぐに生徒たちにスライドを交えながら報告を行った。生徒たちはニュースで得る情報やイメージしかもっていないため、中国に対する印象も少し変わったように感じた。私の話を聞いて、行ってみたいと言っていたので、興味を持っているようであった。彼らの国際理解に少しでもつながれば幸いである。

自分の教科に関しては、中国で学んだことを生かして、授業に反映させていきたいと考えている。具体的に言うと、accuracy(正確性)重視から fluency(流暢さ)重視にシフトしていかないといけないということである。大学入試改革もあり、4 技能重視になっていく流れなので、バランスよく生徒たちの英語力をつけられるような授業を行っていきたい。

●今回初めて中国に行き、教育体制や文化に触れた。新たなことを多く知ったとはいえ、まだほんの一部しか分かっていないと思う。今までもニュースなどで中国についての情報は得ていたが、今回直に中国に触れ、身近に感じるようになったため、目に留まりやすくなると思う。これからさらに多くのことを知り、中国関連のイベントなど様々な場面で発信していきたいと考えている。この研修を良いきっかけにしていきたい。

A-11　富樫　未来

（徳島県板野郡上板町立高志小学校教諭）

（写真中央）

「熱い思い」

人生で初めて海外に行くことになり、日本とは違った文化や生活を目の当たりにしてきた。情報や知識だけでは分からない、その場所で生きている人たちの思いを肌で感じてくることができた。そして、中国の先生方の「教育」に対する思いを知ることができたのは、このプログラムに参加したからであり、今後の自分の教師としての在り方を考える良い機会となった。

訪問した学校では、子どもたちが集中して学べ、かつ自分の力を伸ばせるような教育設備が整っており、子どもたち自身が充実した学校生活を送っていることが分かった。また、それらの設備を使い指導にあたる先生方の研修や組織の中での位置づけは教育の質を向上させるために必要なものだと感じた。どの学校においても、「子どもたちのよりよい成長」を願っており、それに伴った教育活動が成されている。国が違っても、「教育」における【熱い思い】は変わらないことを実感してきた。日本各地の先生方だけでなく、世界各国の先生方に共通するであろう教育に対する【熱い思い】を持ち続ける自分でありたい。

今後の活動予定

●中国に行き、実際に見てきたこと感じてきたことを子どもたちに伝える。そして、昨年中国からの留学生との交流から学んだことと合わせながら、中国についての知識や現状を調べる機会を設け、世界に目を向けるきっかけとする。

また、中国のことを知るだけでなく、日本の（地域の）ことを知ってもらうためにインターネット等を使って、情報を発信する。そこから実際の交流につなげていく。

●本プログラムに参加した先生方との交流を続ける。日本国内でも、地域によっては研修の仕方や学校組織の在り方など様々である。また、校種も違うため、それぞれの校種での教育に対する価値観が存在する。それらを知り、自分なりの「教育」の在り方をつくっていきたい。

また、情報だけでイメージし、善悪の判断をしてしまわないように、実際に見て感じたことが本物であるということを広く伝えていきたい。そして、自分自身も本物を見る機会を増やし、事実を子どもたちに伝えていく。

B-01　山﨑　貴雄

（高知県立高知東工業高等学校教

（写真右）

「スケールの大きさに驚いた」

中国に初めて足を踏み入れた感想は、「規模が大きすぎて逆に実感がわかない」である。北京市の大きさは四国と同じであること、中国内の移動に飛行機で 2 時間 30 分以上、飛行機の窓から地上を見るとどこまでも続く砂漠地帯、敦煌が近く同じ省内にあるといいながら 1,100 キロ離れている、など日本では考えられないスケールの大きさである。その中で、どのような教育制度があり、どのような教育が行われているのかという点に、大変興味がわき、期待感を持って学校訪問をさせていただいた。

砂漠の中に、70 万㎡もの土地を開拓して甘粛衛生職業学院が建設されていた。生徒数も 1 万人を超え、約 40 棟の建物。事前オリエンテーションで、職業教育に力を入れていると聞いたが、その規模に圧倒された。また、西北師範大学附属実験中学も、生徒数は三千人を超えており、私の住む高知県では考えられない学生数である。どの学校を訪問しても、児童生徒は一生懸命になって課題に取り組んでおり、中国の教育に対する熱意が伝わってきた。

今後の活動予定

●基本的に中国のことを知らない教職員がほとんどであり、隣国である中国を紹介するだけでも、大変価値のあることである。そこで、まず手始めに、ちょうど学校だよりの紙面を 1 学期のまとめとして 1 面担当することになったので、報告を行った。

そしてより深く、校内の全教職員と情報を共有できるように 2 学期中に研修会を開催予定である。韓国の工業高校との交流がこの 2 学期よりスタートすることもあり、本校の教職員はアジアの学校については意識をしているので、できるだけ多くの情報を共有して交流の拡大に努めたい。また、生徒集会においても教職員同様に韓国との交流がスタートするまでに中国での体験を話して、グローバルな視点を持つ技術者として活躍できるように成長を促したい。

●工業高校は、基本的にものづくりの学校なので、文化的な交流だけでなく、ものづくりを中心とした交流ができればと考えている。学校としてはこれから体制を整える必要があるは、個人的にはどんどん来てほしいと思っている。高知県内の企業（製造業等）も中国、韓国、インドやその他東南アジアへ進出している。生徒にも世界的視野も持った技術者として育ってほしいので、国際交流の機会をどんどん作っていきたいと思っている。

B-02　阿部　紀子

（横浜市立永田台小学校教諭）

（写真左）

「教育とは何だろう」

今回、訪問させていただいた教育施設のハード面で感じたことを一言で表すとしたら、「圧巻」または「羨望」だろうか。とにかく規模が大きい。また、「こんな所が学校の中にあるなんて！」というような施設設備の連続だった。そして、ソフト面で感じたことは、児童生徒も教職員も「上に目を向けている」ということだった。訪問させていただいた中学高校はどちらも、「進学」に力をいれているようだったし、そのための特進クラスもあった。さらには海外の大学への進学も視野にいれていて、英語教育も充実していた。

それに比べると、日本の学校（特に公立の小中学校）は、「下に目を向けている」といえるのではないか。なんとか取りこぼしのないように、習熟度の低い児童生徒は、いわゆる「取り出し」をしたり、その児童に合った教材を選んで、少しでも学習が身につくように、と工夫したりしている。どちらがいいとは一概には言えないが、「教育」「教える」とは何だろう、教師のやるべきことって何だろう、と考えるきっかけをくれた１週間だった。

今後の活動予定

●児童・教員それぞれへの報告会

夏休み前の最終週に児童向けの報告会の機会を、朝会の中に設けてもらえることとなった。現地でたくさん写真を撮ったので、それをもとに中国の文化（日本との違いや面白さ、驚き）を紹介しつつ、自分が実際にいって感じてきたことを、いくつかの項目に分けて分かりやすく紹介できたらいいなと思う。

また、教職員向けの報告会の場もいただいたので、日本の義務教育（自分の学校の教育方針）をふまえ、その違いや類似点、疑問点等を発信し、職員間で私の感じたことを共有したい。そのことから日本の義務教育や、本校の指導のあり方を私だけでなく、一緒に働いている仲間と考えていきたい。

●絵本の活用

元々は北京師範大学から出版され、日本語訳されている、中国文化のわかる絵本を購入してもらえることになった。季節の行事や、風習、故事などが数冊に分けて紹介されており、絵がたくさん載っているので分かりやすいと思う。自分のとった写真も一緒に用いながら、低学年のクラスにお邪魔して読み聞かせしたり、学校司書さんにお願いして図書室で紹介したりすることで、中国を身近に感じられることのきっかけにしていきたい。

B-03　市橋　由彬

（奈良教育大学附属中学校教諭）

（写真右端）

「知ることの意味」

私にとって中国は未知であり、発展が著しい国というイメージしかなかった。また、社会主義国家で生きる人々はどのような生活を行い、教育を受けているのかという素朴な疑問があった。実際に現地に向かい、児童・生徒や教員の様子、学校の様子や社会の様子を知ることは大変有意義なものであった。何よりも、教員や児童・生徒は自分の学校に誇りを持ち、教育に対して真摯に向き合っている様子が印象的だった。自己主張や自己表現を積極的に行なう生徒、それらの生徒の学びを最大限に深いものとさせるための充実した学校設備や教員の熱意が、これからの中国をさらに発展させ、世界の一員としてのアイデンティティを築くのだと感じた。国家の仕組みは違っていても、目指すべき到達点は酷似しており、互いに心を大切にする教育を発展させていかなけらばならないと痛感した。他者・他国を知ること、そして自身・自国をしることの大切さがボーダーレスな社会を築く上で欠かせないものであると再確認した１週間であった。

今後の活動予定

●本校では国際理解学習の一環として、奈良教育大学の留学生との交流を行っている。中国からの留学生も多数来ており、毎年留学生の話を聞いたり、交流を行うことがメインになっていたが、基礎知識が少ない生徒にとっては実際の様子を想像するのが難しい現状があった。そこで、事前学習として本プログラムの経験を生徒に話すと共に、日本との共通点や相違点について話し合いをさせたり、中国の現状と課題、また見習うべき点を子どもたちの柔軟な視点で考えさせることで、より身近なテーマとして国際理解教育に臨む足がかりとしたいと考えている。また、道徳の教材としても活用できないかと模索している。

私自身、今回の経験を通して、中国の良さや人の温かさを感じた面が大きいのだが、その反対に日本の風土・文化の素晴らしさを再確認できたところがある。子どもたちも同様なものを感じ取れるよう、体験的な活動を多様に取り入れていくことで、視野の拡大につながるようにしたいと考えている。

●中国の新聞、雑誌、教科書等を購入し帰国したので、社会科の教材としての活用や自身の理科教育への活用、また授業展開の再構築に役立てたいと思う。また、附属中学校などでは博物館的な展示が多くなされており、教室での教材の展示や、自由に手に取りいつでも学べる環境の重要性を痛感したところがある。本校でもそれらが取り入れられないかを模索すると共に、一般公開も含めた地域に開かれた学校づくりに尽力したい。

B-04　菅野　広樹

（自由学園男子部教諭）

（写真左）

「『戸籍と住民票』が質の高い教育を受ける条件」

中国訪問プログラムを通して、北京、蘭州、上海の３つの都市を訪問し、都市部と農村部との比較ができたこと、様々な学校種を見学したことで、中国の教育について巨視的に考察することにつながった。

そうした中、私が最も関心を持ったことは、小学校の入学制度である。蘭州市にある北京第二実験小学校蘭州分校は、大変充実した学校設備があり、そこで学ぶ児童も生き生きとしていた。入学条件を尋ねると、「戸籍と住民票」という返事があった。つまり、希望する小学校の学区に住んでいることがこと条件ということだ。学区の学校に通うという一見平等なシステムだが、ある意味で市場原理が生じる。定評のある学校の学区は需要が高まり地価が上がるため、人気の学校への入学は富裕層に有利といえる。また、学校間での教員の移動は基本的になく、これも教育の格差につながる。

翻って、日本でも教育格差の問題は広がっており、この両国に通底する課題への取り組みを比較することは課題改善に向け有意義なことだと考える。

今後の活動予定

●プログラムを通した学びを以下のような対象と意図で報告する。

≪夏休みの期間を使ってプログラムの内容をまとめる予定≫

・生徒への国際理解・多文化理解を念頭に置いた報告

・同僚へ教育的な視点からの報告

・留学生との対話

・中国の学校との交流（方法を検討中）

●中国研修プログラムでお話した中国側の先生方との交流を継続し、本校と中国の学校との交流の糸口を探る。

●今回の研修プログラムであった、日本の先生方との交流を継続し、情報交換を行うことで教育活動の充実につなげる。

B-05　窪津　宏美

（横浜市立南吉田小学校主幹教諭）

（写真左）

「中国の国・文化・そして人から学んだこと」

横浜市の教員として中国の地を踏み、文化を感じ、現地校を視察できたことは大変有意義でした。赴任２校目で担任した１年生から「先生はなにじん？」ときかれ驚いたことがあります。この小学校には様々な国の背景をもつ児童が在籍していました。現任校では半数以上の児童が外国籍または外国につながるという環境で、さらに多文化共生や多様性の尊重を考えながら教員生活を歩んでいます。中国にルーツのある児童が一番多く、来日する前にはどのような教育を受けていたのかがわかればより良い支援ができるのではと思っていました。今回のプログラムでは教員同士の交流が設定されていて、普段感じている疑問を直接投げかける機会が得られました。また訪問した学校の児童生徒たちによる中国文化の発表を見せていただきながら、本校の児童たちが中国のアイデンティティを感じるような交流ができたらと真っ先に考えていました。今後は交流を通して、相互理解を深めていきたいと考えています。

今後の活動予定

●視察からわかった中国の実際の学校教育現場を提示したり、児童間の交流を積極的に進めたりする。

・６月　学級ホームルームで話をする

・７月　学年に向けて写真掲示

・９月　学年で図工「水墨画」取組とはがき交流の開始　※詳しくは次ページ欄

・10-12 月　教職員への提示

●本プログラムで日本全国の教職員たちと知り合ったことは大変貴重であった。総合教科を通して児童間交流を進めようという具体的な計画もある。

●現在学んでいる大学院博士課程では、「来日児童と家庭への初期支援とその効果」について研究を進めている。今回は国の教育方策をつかさどる教育部において、自身の研究にかかわる質問を具体に投げかけ、回答を得ることができた。このデータをもとに研究を発展させる予定がある。

B-06　宮﨑　洋司

（札幌市立大通高等学校教諭）

（写真右）

「中国のエネルギーを感じて」

この度の訪中では、至る所で中国という国の「勢い」を感じさせられた。10 年程前に訪れた時とは様子がガラリと変わっていた。超近代的でデザイン性に富んだ高層ビルが林立、目下建設中の高層建築もそこここに・・・著しい経済成長に伴って急速に発展を遂げていた。

この発展は、おそらく教育の面でも言えることであろう。今回視察させていただいた 6 校は、いずれも最新の設備を整え、優秀な教員が集められていた。優秀な子どもたちが集まる学校ばかりではあったが、主体的に生き生きと学び、堂々と自分の考えを語る子どもたちの姿は眩しかった。そして、子どもたちの問題解決意識や豊かな想像力が形になっていくような実践は、学ぶことの楽しさや喜びを実感させ、自信を深めさせ、次の学びへの意欲をさらに喚起させる…それは自らの手で未来を切り拓く力強さにつながる。そのような教育を目の当たりにした思いだった。

国が違っても、私たち教育に携わる者は子どもたちが未来に明るい展望を持てるようにと願うものである。一人でも多くの子どもたちが、明るい未来を創造し、自信を持って歩んで行けるよう、子どもたちの教育に力を尽くさなければとの思いを強くした 8 日間だった。

今後の活動予定

●今年度中国への海外視察研修に参加し、中国の国民性や風土・文化・歴史・教育事情などについて学んできて、今まで以上に国際交流・異文化理解に力を入れたいとの思いを強くした。特に異文化理解・多文化交流の機会の多い本校の諸々の教育活動においては、今回の研修で得た学びを校内外に発信し、地域社会に還元しやすいと考える。本校の海外帰国生徒の中には、日本での生活に中々馴染めずに苦労している生徒もおり、そのような生徒が少しでも早く日本の社会に馴染めるように、ささやかながら尽力したいとも考える。

また、今回は貴重な文物も間近で見ることができた。私の専門科目は書道なので、そこで得られた感動や興奮を素直に生徒に伝え、書道の魅力を今まで以上に強く広く発信し続けたい。

B-07　仲田　郁子

（千葉県立流山おおたかの森高等学校教諭）

（写真左）

「さらにもう一歩」

これまで中国本土を訪れたことはなかった。その機会がすぐに来るとは思っていなかったのに、本プログラムで参加者を募集していることを知って、突然猛烈に行きたいと思ったのは、本物を見たいという気持ちであったと思う。

折しも北京に到着したのは、６月３日。あの６月４日の前日である。４日早朝訪れた天安門広場は何事もなく静かだったが、前夜訪問を試みたメンバーは検問で大変な目にあったと聞く。そして蘭州で迎えた６月７日は中国の大学入試の日。子どもたちを見送る両親、受験生の乗ったオートバイに交通整理の警官。これも今の中国の現実の姿だった。さらにギョーザも麻婆豆腐も一度も登場せず、パクチーの香りに全身が包まれたのもリアル中国なのだ。

中国はこれまでやや遠い隣国だったが、人がいる限り生活があり、教育がある。学校を訪問し、子どもたちの様子を見、教職員と交流して、一歩中国に近づくことができたのは間違いない。さらにもう一歩近づくために、今できることは何かこうして考えているのが、今回の最大の成果である。

今後の活動予定

●中国訪問記を本校ホームページにアップし、国際理解教育に取り組む本校の特徴を、地域の中学生や本校生徒および保護者に伝える一助とする。その際、学習に励む中国の高校生の様子、広い中国の地理的特徴、伝統文化教育などを紹介しながら、本校でのさまざまな取り組みの意義を改めて考えさせ、ユネスコスクールに学ぶ高校生としての自覚を高めたい。

●家庭科教師として、以前より生活文化教育の実践と研究に取り組んでいる。中国における生活文化教育の実践を見学できることを楽しみにしていたが、残念ながら、中国では後期中等教育において、日本の家庭科に相当する教科はなく、特に衣食住に関する生活的自立力を育む教育はなされていないようだった。それでも、生活文化を見直す動きは出てきており、書道や茶道、古典文学などの教育が復活してきているとのことなので、いつかきっと食や衣についての実習を伴う学びの価値が認められる日もくるだろうし、研究を続ける中で、中国の研究者との交流を深めていけることを期待している。

さらに付け加えるなら、中国料理とその普及の歴史を改めて勉強したいと思うようになった。食は奥が深い。私たちの先輩がどのように中国料理をアレンジしてきたか知ることによって、日本人の食への考え方がより見えるような気がする。

B-08　佐々木　稔

（京都教育大学附属桃山中学校副校長）

「中国の学校における教育理念と人材育成」

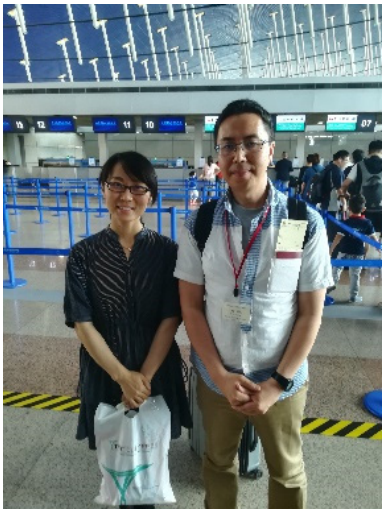
本プログラムでは、急激な成長を遂げる中国の国家戦略としての教育への巨額の投資と、それに応えるべく基幹校としての役割を担う名門師範大学附属の実験中学と小学校の有り様を目の当たりにした。さらには、地方都市（甘粛省蘭州市）における省政府をあげての全面的なバックアップを背景に、大都市部の教育を意識しながらも、それらを超えようとする意気込みと高い教育環境、教育水準でもって独自の教育を創造する学校の底力を見せつけられた。そこでは、特に最先端の科学技術分野と国際社会において貢献できる人材の輩出という具体的な教育実績を獲得しようとする、地方都市の基幹校としての、ある意味で意地とも言うべき誇り、使命感を感じた。崇高な教育理念を掲げて人材育成に邁進する教員の姿にも圧倒された。一方で、医薬衛生業界で活躍できる学生を育成する職業学校や、障がいを抱えた子どもたちの能力を引き出し、寄り添いながら自立を支えていく特別支援教育の実際も見ることができた。そこにも中国社会の未来を支える確かな人材を育成するという明確な理念を直に感じることができた。中国の国家プロジェクトとしての教育政策と巨額の投資、それに応えるべく、教育の理想を掲げて、優秀な人材の輩出を使命とする中国の学校教育の有り様、まさに発展を遂げる中国社会の力強さを体感した研修プログラムだったといえる。

今後の活動予定

●帰国した生徒や若干の外国人生徒を受け入れている本校にとって、とりわけ中国からの帰国生徒や中国人生徒への生徒理解においては、先入観や偏見にとらわれることなく、彼らが育った中国の文化背景や価値観、中国独自の学校教育の理念や学校文化、学校風土などを客観的な事実として理解しておくことはとても重要である。今回の中国派遣プログラムによって実感した中国の学校教育における明確な理念と確固とした教育評価の考え方、そのシステムなどを踏まえた上で、日本との教育ギャップを的確に客観的にとらえ、個々の生徒への適切な理解と丁寧な指導、支援を行っていきたい。このことは、中国以外の世界の各国からの帰国生徒への理解にも通じ、さらには多様な背景を抱える一般生徒への適切な理解においても普遍的な視点として重要である。管理職としても、これらの視点を、本校の教員を対象に多様な会合や研修の場で伝えて、啓発したいと考えている。

B-09　土屋　隆史

（横浜市教育委員会事務局指導部
国際教育課指導主事）



（写真右）

「中国政府日本教職員招へいプログラムに参加して」

中国は目覚ましい発展を遂げている最中であり、二十年近く前に滞在していたころの中国とは何もかもが違っていたが、それは学校教育においても例外ではなかった。十年以上前には中国からの教職員訪問団とともに宿泊研修に参加したことがあったが、ある中国の教員は「中国の学校教育は日本よりもかなり遅れている」とおっしゃっていた。しかし今では設備や教育システムにおいて、日本を超えている部分もかなりあるように感じる。今回は各地域の名門中の名門校ばかりの視察ではあったが、どの学校においても日本よりも教育環境の設備等が整っているだけでなく、児童生徒が自信を持って学習や諸活動に取り組んでいた。

現在日本では外国人等児童生徒に対する日本語指導の問題がクローズアップされている。今回視察した学校には外国人等児童生徒はほとんど在籍していなかったが、経済大国となり外国人が増えていく中国も、いずれ同じ問題に直面すると思われるので、今後の中国の教育事情にも注目していきたい。

このような貴重な経験を与えてくださった関係の皆様には心から感謝申し上げるとともに、今後も中国との友好関係を維持できるよう、児童生徒や学校の支援に努めていきたい。

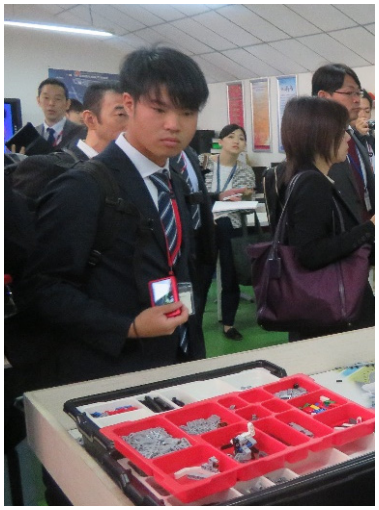
今後の活動予定

●特に中国人児童生徒を含めた外国籍等児童生徒の現状や背景に関する教職員の理解については、本プログラムで自身が体験、感じた内容を含めた校内職員研修を実施し、教職員が身近なこととしてとらえることができるよう工夫したい。そのような校内職員研修を通して、外国籍等児童生徒やその保護者が入りやすく、そして気軽に相談できる学校となるよう環境整備にも努めていきたい。

●中国人児童生徒を含めた外国籍等児童生徒の受入経験のない学校・教職員は、突然の編入学に対してその児童生徒をどのように受入れ、支援をしていけばよいか戸惑うことが多い。どの学校に編入しても同じ支援を受けることができる各学校での受入体制を整えていきたい。また、支援の方法や日本語指導法についてだけでなく、中国における教育事情等の情報を、必要に応じて学校や実際に指導にあたる教職員にも伝えていきたい。また、学校管理職研修から初任者研修に至るまでの各階層における日本語指導が必要な児童生徒理解研修等では、必要に応じて、中国の教育事情に関する内容も盛り込むことを今後考えていきたい。

B-10　矢吹　卓也

（箕面こどもの森学園小学部担当）



「国際比較と全国の教職員との交流」

今回のプログラムでは、以下の２点において有意義だったと感じる。

１つ目は、小学校から高校、特別支援学校、職業学校など、多様な学校の見学ができたことである。また、地域も上海、蘭州、北京と複数行かせていただけた。複数の学校を見学できたことで、私の中で日本の教育と比べ、中国の教育とはどのようなものなのか考えることができた。そのような国際比較の視点が持てたことが有意義だったように感じる。

２つ目は、日本の全国の教職員や文部科学省の方と宿泊生活を通して、交流できたことである。このように、全国の教職員が集まり、ともに学び、交流できる機会はなかなかないように思う。交流する中で、日本に帰ってからも活きるつながりができたり、ともに教育について考えられたことが有意義だったと思う。

この経験やつながりを、子どもたちや教職員との関わりの中で活かしていけるようにしたい。

今後の活動予定

●主に小学生に対して、学校生活の中で、中国に触れる話題があったときに、自分が体験してきたことを話したい。また、テーマ学習で中国に触れる部分があったときにも、積極的に中国のことを伝え、児童が興味を持つきっかけをつくりたい。
また、中国との交流が必要な学習場面があれば、今回訪問した学校と連絡をとり、交流する。
●自身のブログや SNS を通して、中国に行って感じたことを発信し、この体験を広く伝え、交流したい。また、今回ともに参加したほかの教職員の方との情報交換や交流を継続したい。
●児童間の交流としては、テーマ学習の中で他国の児童との交流の必要性を感じた際、訪問先の学校とコンタクトをとり、交流の機会をつくりたい。交流の方法としては、スカイプなどを通しての交流か、本校が参考にしているフレネ教育の学校間通信が考えられる。実施の可能性については、学習が子どもたちの意思を尊重して進んでいくため、不確定である。

教員間の交流に関しては、学校の形態に違いがあることや、中国政府がオルタナティブ教育をあまり認めていない点から難しい部分があると感じている。しかし、これからも情報を発信し、興味を持ってもらえれば交流することも考えられる。

B-11　吉田　智仁

（桜美林中学校・高等学校教諭）

「中国と日本の教育」

本プログラムに参加するにあたって、私は他国と日本の教育の違いに注目していた。近年の日本で教育改革が推進されている中で、中国の現状はどうなのかということが気になっていたのだが、実際に中国の様々な学校を訪問する中で、中国の学校も同様に社会の変化の中で教育の改革を目指していることを知った。「ICT 機器の活用」や「主体性をもった人格の育成」など、日本でもすっかりお馴染みとなった教育方法や教育目標を掲げていることを知り、国は違えど教育現場が直面する課題は同じであると感じた。

一方で、教育文化の違いというものに驚く場面もあった。お国柄の違いといってしまえばそれまでだが、日本では愛国心教育の危うさが指摘される中、中国の小学生から「愛党愛国」「祖国万歳」という言葉が自然と飛び出すことに非常に驚いた。教育とは、日本では「個人の人格の完成」を目指しておこなうものとされるが、中国では「国家の構成員として必要な資質を養う」ことを第一の目標としているという。どちらが正しいというわけではないのだろうが、何のために教育を行うのか、改めて考えさせられた。

今後の活動予定

●中国での滞在を通じて知った中国の文化や風土は社会科教員としては非常に貴重な経験であり、地理や歴史などの授業の中で積極的に活用していきたい。特に内陸部と沿岸部での民族や風土の違いはとても興味深かった。

●中国での経験と同時に、日本各地の先生方との交流の場を持てたことは自分にとって非常に大きな財産となった。様々な地域と異なる教育現場で働いている先生方と交流する中で、教育の多様性というものを改めて実感した。勤務校は私立学校であるので、比較的均一な生徒たちがいるが、公立校などでは育った環境や国籍が異なる生徒が数多く在籍しており、そうした生徒たちに適した教育を施すことの大切さと難しさを知った。また、様々な研究活動や授業実践に取り組まれている先生方のお話を聞くことで、自身の仕事に対する意欲もより一層高まった。

本プログラムでお会いした先生方との縁を今後も大切にしながら、先生同士の交流や学校同士の交流へと発展させていきたい。

事業担当者コメント

北京、甘粛省蘭州市、そして上海を巡る7日間のプログラムを今年も無事に実施することができました。ACCUからは職員2名が、日本各地から参加された先生方とともに訪中させていただきました。4月末からプログラム参加者募集を開始し、約2週間という非常に短い募集期間にもかかわらず、高い志を持った多くの先生方が集まって下さったことを大変嬉しく思います。そして、参加者にとって非常に新鮮な体験となった、甘粛省という内陸の地域への訪問を含む充実したプログラムをご準備くださった中国教育部をはじめとした関係機関の皆様に、改めて感謝申し上げます。

本年のプログラムでは、北京で1校、甘粛省蘭州市で4校、上海で1校の計6つの学校への訪問と甘粛省の歴史・文化を体験する機会をいただきました。限られた時間ではありましたが、いずれの学校でもその学校の「よさ」「自負するところ」「育てたい人間像」が伝わり、多くを学ぶ訪問となりました。また、訪問期間と大学入試「高考」が重なり、試験場に向かう生徒や応援する保護者、警察の車両の様子をバスの中から見ることができたのも貴重な経験でした。こうして実際に目で見たことが各参加者の体験となり、「私の見た中国」を周囲に伝えることでプログラムの目的である交流、理解が広まり、深まることと思います。

当センターが実施している国際教育交流事業では、プログラムを通して学びあいのきっかけを提供し、互いを理解しようとすることで寛容な人・社会・地域を皆さんとともに創っていくことを目指しています。本報告書にも掲載されている、参加された先生方の感想や抱負から、本プログラムを通してたくさんのきっかけや意識の変化が生まれたことを感じています。そのきっかけが教育を通して多くの方々に共有され、更なる交流に繋がっていくことを願っています。

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター
国際教育交流部　高松　彩乃

付録

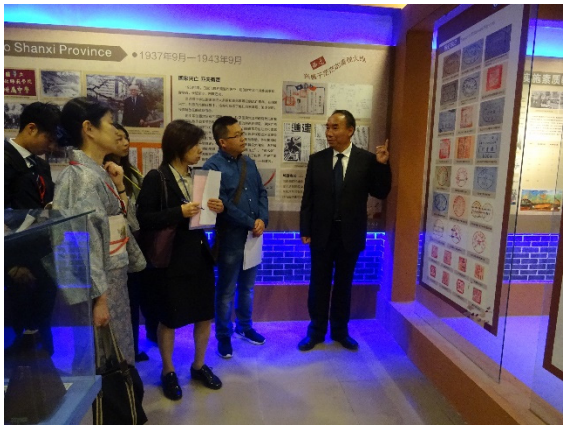
教育部・歓迎会

教育部にて

中国教育部の歓迎昼食会

学校訪問①

北京師範大学附属実験中学



西北師範大学附属中学

北京第二実験小学校蘭州分校

学校訪問②

甘粛省衛生職業学院

蘭州特別教育学校

上海師範学校附属小学校

文化体験・その他

これまでのプログラム実績

実施期間	開催地	訪問人数
2003 年 3 月 2 日～8 日	北京市、浙江省杭州市、上海市	12 名
2004 年 4 月 25 日～5 月 2 日	北京市、天津市、遼寧省大連市	15 名
2005 年 5 月 22 日～29 日	北京市、新疆ウイグル自治区烏魯木斉市、上海市	14 名
2006 年 5 月 21 日～28 日	陝西省西安市、天津市、北京市	14 名
2007 年 5 月 20 日～27 日	北京市、海南省（海口市、三亜市）、上海市	22 名
2008 年 6 月 15 日～22 日	北京市、青海省、上海市	22 名
2009 年 6 月 21 日～28 日	北京市、内蒙古自治区（呼和浩特市、包頭市）、上海市	25 名
2010 年 5 月 30 日～6 月 6 日	北京市、貴州省貴陽市、上海市	25 名
2011 年 5 月 29 日～6 月 5 日	北京市、湖南省長沙市、上海市	25 名
2012 年 5 月 27 日～6 月 3 日	北京市、内蒙古自治区呼和浩特市	25 名
2013 年 6 月 23 日～29 日	北京市、甘粛省蘭州市	25 名
2014 年 5 月 18 日～25 日	北京市、貴州省貴陽市、上海市	50 名 2012-2013 年枠：21 名 2013-2014 年枠：29 名
2015 年 5 月 24 日～31 日	北京市、広西チワン族自治区（南寧市、桂林市）、上海市	25 名
2016 年 6 月 12 日～19 日	北京市、寧夏回族自治区（銀川市）、上海市	25 名
2017 年 5 月 16 日～23 日	北京市、安徽省合肥市、上海市	25 名
2018 年 6 月 3 日～9 日	**北京市、甘粛省蘭州市、上海市**	**25 名**

計 374 名

※ 2003 年度から 2017 年度は国際連合大学「国際教育交流事業」として、2018 度以降は文部科学省「平成 30 年度初等中等教職員国際交流事業」として、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センターが委託を受けて実施・運営。

文部科学省委託 平成３０年度初等中等教職員国際交流事業

中国政府日本教職員招へいプログラム　実施報告書

2019 年 1 月

編集・発行　公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

〒101-0051
東京都千代田区神田神保町 1-32-7F　出版クラブビル
電話　　(03)5577-2853
Email　accu-exchange_ml@accu.or.jp
URL　http://www.accu.or.jp

Printed in Japan by Wako Inc. [120]
ⓒ2019　Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)

Think Globally, Act Locally

ACCU
Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター